

東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時):工学系研究科修士一年

参加プログラム:Building the TOMODACHI Generation

卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体
5.民間企業(業界:) 6.起業 7.その他(未定)

<p>参加プログラムの概要 ワシントン DC にて研修を受けるプログラム。二週間のプログラムのうち、一週目は主にアメリカの NPO について学び、二週目はリーダーシップなどのスキルを学びつつ、アメリカ人学生3人と日本人学生4人のチームを組みグループワークを行う。ワークの課題は、東北における大震災に関連する NPO の立ち上げの企画。</p>
<p>参加した動機 昔から英語が苦手であったこともあり、国際的な経験からは縁遠かった。そのため、学生のうちに少しでも経験を積んで、国際的な感覚を得たいと思ったから。また、母方の実家が地震で被災していたので、震災に関する NPO の活動にも興味があったから。</p>
<p>参加の準備</p> <p>①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど) 担当教員からの推薦状が必要であること、アプリケーションの書類は多少多めであることから、興味があるならば早めに準備することが望ましい。</p> <p>②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど) 手続きは主催者側からの丁寧な誘導があるため、まったく問題はない。</p> <p>③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等) 特に必要なし。</p> <p>④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等) 一般的な海外旅行保険に加入することが求められる。</p> <p>⑤参加にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(授業履修・単位・試験・論文提出等に関して) 授業のない期間であるので、特に問題なし。</p> <p>⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等) 特に準備はしなかったが、英語力は鍛えておくべきであったと思う。</p> <p>⑦日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど 乾燥した気候であるので、保湿クリームなどは忘れずに。出発前は睡眠時間をよくとり、体調を整えること。プログラム開始後は休む時間はない。</p>
<p>学習・研究について</p> <p>①プログラムのスタイル、印象に残っている内容等 グループワークは大変であったが印象に残った。違うバックグラウンドを持つアメリカ人学生との議論は、苦労の連続であった。日本人の中で過ごしていて当たり前と思うことが全く当たり前でないのだと、身をもって実感した。</p> <p>②学習・研究面でのアドバイス アメリカの NPO に関する講義は、理系学生にとっては縁遠い話に思えるかもしれない。しかし、興味を持って話を聞いてみると、今まで聞いたことのない視点からの話が多く、面白いと思う。</p> <p>③語学面での苦労・アドバイス等 語学は最も苦労した部分である。講演者が早口だと途端にわからなくなった。雑音があると日常会話も聞き取れない。自分の英語力の低さを悔やみ、最低限聴解力だけは鍛えておくべきだったと感じた。(参考スコア:TOEFL94)</p>
<p>生活について</p> <p>①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など) 宿泊先は主催者側が提供してくれる。費用はかからない。二人部屋(基本)でありながら、割と大きめのルームであるので、快適であると思う。</p> <p>②生活環境(気候、周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など) ちょうどプログラム期間中に歴史的な寒波に襲われたので、気温は氷点下十度を下回ったこともあった。防寒対策は綿密に行うべきであった。食事は各国の料理を食べる機会があるので楽しみにしてほしい。</p> <p>③危機管理関係(渡航先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など) メトロは東京と違って薄暗く、雰囲気もあまりよくない。一人で乗るのは避けた方がよさそうであった。ホテルは治安のいい地域に立地しているため、怖い雰囲気はないが、ワシントンの治安はあまりよくないとのことであるので注意。</p> <p>④要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算) ほとんどの費用は主催者側の負担であり、自己負担額はお土産と日本での交通費くらいである。一万円使ったかどうか</p>

かの負担であった。

⑤奨学金(支給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)
費用はかからないので必要なし。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)
休みはない。自由時間もほとんどない。

参加プログラムの環境について

①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)
プログラムはとてよく企画されており、サポート体制も十分である。

②設備面の状況(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)
使う機会はない。

プログラムを振り返って

①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他の所感

理系学生にとっては、内容はあまり普段学んでいることに近くはない。しかし、得られる経験という意味では理系学生の方がむしろ多くのものを得られるプログラムであると思う。参加している学生は、文系学生がほとんどであり、理系学生は少ない。アメリカ人学生はおそらく全員文系学生である。グループワークではバックグラウンドが違う相手と、英語で議論しなくてはならない。このような、あえて自分のフィールドではない分野に飛び込む経験は、間接的に今後の研究活動や就職後の社会人としての生活にプラスに働くのだろうと思う。

②参加後の予定

未定

③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

多様なバックグラウンドを持つ学生が参加してこそ、プログラムも面白いものになると考えて選考も行われていると思う。ぜひプログラムの内容と自分の専門に関連がなさそうと思ってもチャレンジしてほしい。

その他

①準備段階や参加中に役に立ったウェブサイト・出版物

プログラム主催者側からすべての情報は提供される。

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい中の写真があれば添付してください。

東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 情報理工学系研究科 修士2年

参加プログラム: Building the TOMODACHI Generation

卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) ③公務員 4.非営利団体
5.民間企業(業界:) 6.起業 7.その他()

<p>参加プログラムの概要 日米の学生がワシントン DC に集い、授業やグループワークを通じて、市民社会の概要や役割を学ぶ。同時に、異文化理解、リーダーシップ、パブリックスピーキングスキル、ネットワーキングスキルなども身につけることができる。講義やネットワーキングレセプションなどにおいて各セクターの著名な方と接することも可能。 また、日米両国の市民社会の役割・相違点などを理解すると同時に、グループワークを通じて、東北復興支援のために市民社会や各セクターがいかに寄与できるかを考えることも目的としている。</p>
<p>参加した動機 理系ではあるものの、以前より政治や市民社会、とりわけ、日米における市民社会の違いや各セクターの関連について興味があった。また、講義だけでなく、日米両国の学生がチームとしてプロジェクトを作り上げることにより相互理解や語学力向上につながるのではないかと大いに期待していた。加えて、「異文化理解、リーダーシップ、スピーチ、社会的責任、イノベーション、問題解決能力、批判的思考法、コミュニケーション、ネットワークのスキルなどのグローバルで活躍するため重要となるスキル」を学ぶことができる点も非常に魅力的であったため参加を希望した。</p>
<p>参加の準備</p> <p>①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど) 学内選考書類に加え、学内選考通過後は Washington Center 側の担当者とメールベースでやりとりが多数行われた(当初なぜか私のメールアドレスに何通かメールが届いておらず、本部国際交流課の方にお世話になりつつ、かなりやりとりをすることとなった)。</p> <p>②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど) なし</p> <p>③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等) なし</p> <p>④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等) 民間の海外旅行損害保険に加入。日本前泊・後泊分も加入必須であった。 が、アメリカに到着して最初に Washington Center から保険書類を渡された(先方が加入していたらしい…)</p> <p>⑤参加にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(授業履修・単位・試験・論文提出等に関して) 修士学生だったこと、修士論文提出後であったため特になし。ただ、最終提出が 2 月末だったため前倒しで提出してから渡米した。</p> <p>⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等) もう少しスピーキング、リスニング力を向上させて行きたかったが、修論に追われていたため、ほとんど準備できなかった。以前 TOEFL iBT で 100 点程度を取得していたが、リスニング力には非常に課題を感じた。</p> <p>⑦日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど 持参したほうがよいもの: 先方がすべて手配してくれるため特になし。防寒(-20℃になることも)、常備薬程度。 やっておくべきこと: 語学力の向上。とくに、リスニング力、スピーキング力。</p>
<p>学習・研究について</p> <p>①プログラムのスタイル、印象に残っている内容等 1週目は各セクターの著名な方からひたすら講義を受ける。ちなみに、毎日大量のリーディングアサインメントが課されるため、行きの飛行機内では参加者皆が必死で課された論文や資料を読んでいた。2週目以降は米国学生と合流し、東北支援のためのプロジェクトをグループごとに練り上げることとなる。 プログラム2日目のみ観光に充てられているが、その他はほぼ自由時間がない。特に2週目以降は皆同じホテルに宿泊していることもあってか、割くことのできる限りの時間をグループワークに充てることとなった。</p> <p>②学習・研究面でのアドバイス リーディングアサインメントが非常に多い。が、同様の主張が繰り返されているものや統計的なものもあるので良い意味で要領よく読むことが大切。また、リスニングにはきちんと集中したほうが良い。基本的には、プログラムのスケジュールに沿っていけば、市民社会の概要や役割、日米の違いについて自然と学んでいけるようになっているため、事前知識について心配する必要はないと思う。</p>

③語学面での苦勞・アドバイス等

日本人学生のうちおそらく半数以上は帰国子女であったこと、相手の米国学生もモチベーションの高い人が多いこともあってか、授業や議論がどんどん進んでいった。リスニング力に以前より課題を感じてはいたが、今回は特にそれを痛感した。いくら良い案や良い作業の進め方があったとしても、リスニングに不安があると「もしかしてこれももう話されていたかな…」「的外れなことを言っていないだろうか…」などと考えてしまい、議論についていけなくなってしまう。スピーキングに関しては、端的かつ要領を得た発話を心がける必要があると感じた。

東大参加者は参加者の中で年長組だったこともあってか基本的にどちらかというあまり主張をしなかったが、今から考えると、もう少し主張をすれば語学力、コミュニケーション能力もさらに向上したのではないかと思う。

生活について

①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

先方が(前泊、後泊ふくめ)ホテルを手配して下さる。基本2名1室。

②生活環境(気候、周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

気候: 1897年以来の大寒波だったらしく、 -20°C 以下になることもあった。私は東京仕様で行ったため、なかなかつらかったが、意外と慣れる。とはいっても、帽子があれば違ったかなと思う。(スキー場以上と思っても良いレベルの寒さ)

周辺の様子: 他の地域に比べると割と治安は良い地域とは言われていたが、それでも夜22時以降の外出は極力避けるように言われた。

交通機関: ホテルから Washington Center までは徒歩5分。その他の移動は先方の手配してくれたバス、または地下鉄。ちなみに DC の地下鉄はあまり綺麗ではない。

③危機管理関係(渡航先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

治安は基本的に悪くない。が、このご時勢なのでやはり少しピリピリした感はある。

私は(参加者の1人が性別を間違えて登録していたことにより)偶然1人部屋を割り当てられたが、たまには一人になる時間を作ったほうが良いと思う。また、プログラム中、極寒だったこともあってか、日米学生ともにプログラム内で風邪が流行ってしまったので、(スケジュールは厳しいが)なるべく睡眠をとる、うまくストレスを解消する、一人になる時間を作る…といった心身の体調管理も非常に重要。

④要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空賃や宿代から施設入場料、食事代、交通費に至るまで先方が負担して下さる。

個人的に負担したものは土産代のみ。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

なし

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)

基本的にプログラムのスケジュールで予定が一杯になるが、時折、夕方に近郊を廻る程度の活動は可能。

参加プログラムの環境について

①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

Washington Center 側から2人事務面、生活面、スケジュール面でサポートについてくださる方がいる。また、日本人学生同士で助け合うことも可能。

②設備面の状況(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)

講義受講会場である Washington Center では無料 Wifi が飛んでいる。また、ホテルに小さなジムがある。食事は基本的に先方がすべて手配して下さるので心配する必要はない。

プログラムを振り返って

①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他の所感

偶然にも、東大からの参加者3人は全員修士学生だったが、このプログラムは是非もっと若い時点で行くことをお勧めしたい。まず、アメリカ学生側は大体が20歳くらい、それでもグループワークや意見の主張に長けていることに非常に驚かされる。同時に、日本人学生側も過半数が帰国子女ということで国籍・年齢関係なく怖気づくことなくコミットして姿を目の当たりにしたことで、(東大の中で)ある程度英語ができると思っていても、まだまだ足りない部分が多いと感じさせられた。また、2週間強、日本人学生と集団生活をするようになるので、この年齢で集団生活をするのはある種とても新鮮だったし、他大学の学生と授業の合間や移動中、または夜にロビー等で語り合ったのも非常に刺激的だったように感じている。

今後、私はしばらく学生ではいられなくなるため、本プログラムで感じた語学への課題等について、時間をかけて集中的に向上させていくことは厳しいかもしれない。が、今後も私なりに出来る限り語学に時間を割いて行きたいとより強く思うようになったし、ネットワーク(ちなみに、レセプションには様々な方がいらして下さるので、自身の頑張り次第で本当に様々な方とお話することも出来る)や交友関係を大切にしていきたいと思っている。

②参加後の予定

来年度以降は社会人として働くため、どれだけ時間が取れるかはわからないが、本プログラムで広がった視野をさらに広げていくことができるよう、交友関係、語学力向上、国際交流、すべての面で最大限努力をしてきたいと考えている(すでに日本人学生と連絡を取り合ったり、旅行先で再会したり、また新たに人を紹介していただいたりしている)。来年度以降、本プログラムの主要 organizer の TOMODACHI プログラムにコミットしたいが、学生でなくなるのでどれだけ自由に活動できるか…その点において非常に残念に思っている。

③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

海外に行くのに、早すぎるということはありません。少しでも興味があるならば、是非とも参加をしてほしいと思います。私は高校の頃より「海外を見てみたい」「語学をもっと勉強したい」という意欲が他の人よりもかなり強かったほうだった気がします。進振りや学業、研究、サークルやバイト…など様々なことで機会を逃してきたように思います。もちろん、日本で精一杯取り組むべきこともあるのは確かですが、是非、興味のある国、プログラムには自分から果敢に挑戦して行って頂きたいです。海外で学んだこと(それが良い経験であれ辛い経験であれ)はきっと、自身の視野をより広げることになるのではないかなあと個人的に最近より強く思うようになりました。

以前は東大から海外留学をすることに対するハードルが(学業、スケジュール、環境など様々な観点により)高かったように思いますが(海外志向の非常に高かった私が学部時代に海外にほとんどいけなかったことがその証左です)、ここ数年そのハードルが低くなってきたように感じています。ですので、志の高い方も迷っている方も是非、果敢に挑戦してください。

その他

①準備段階や参加中に役に立ったウェブサイト・出版物

Washington Center から提供される資料にほぼすべての情報が載っている。

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい中の写真があれば添付してください。

(次ページ添付)



東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 公共政策大学院経済政策コース2年

参加プログラム: Building the TOMODACHI Generation

卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) ③公務員 4.非営利団体
5.民間企業(業界:) 6.起業 7.その他()

参加プログラムの概要

東北の震災復興に向けて、社会問題の解決案をグループで考え、発表する。
アメリカと日本の nonprofit セクターの役割や制度について理解する。
リーダーシップや自分の長所を生かしてチームで物事を成し遂げる力をつける。

参加した動機

東北のボランティアをしているため、復興について日米の学生と思案することに魅力を感じた。アメリカの学生とのグループワークをつうじて、コミュニケーション力や自分の特性を生かしてチームに貢献する力を身につけたかったから。

参加の準備

① プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)
とくになし

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)
特になし。ESTA の手続きはネット上で簡単に済むものだった。

② 医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)
なし

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)
クレジットカードに付帯している保険を利用
保証額についてカード会社に問い合わせ確認しておいた。

⑤参加にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(授業履修・単位・試験・論文提出等に関して)
特になし。

⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)
特になし

⑦日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど
テーマが東北の震災復興や日本の非営利組織についてだったので、その2つのテーマについてあらかじめ知識や自分の思いがあるとグループワークでより生かすことができる。

学習・研究について

① プログラムのスタイル、印象に残っている内容等
講義を通じて知識をつける部分と、チームで取り組む活動や、社会に出ていきけるネットワーキングスキルやスピーキングスキルなどの実践的なスキルの習得をおこなう部分とでバランスがとれていた。

②学習・研究面でのアドバイス
毎日のリーディングアサインメントが多いので、あらかじめプログラムが始まる前に読んでおいたほうがよい。

③語学面での苦勞・アドバイス等
アメリカの学生は日本人も英語が当たり前と話せると思っているため、早口で話しかける人が多く、聞き取りに苦勞した。話しているところがわからないのか、わからない場合は遠慮なく聞くとよいと思う。

生活について

① 宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)
ホテルは部屋の広さも十分にあり、快適

② 生活環境(気候、周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)
気温はマイナス15度程度と非常に寒かった。交通機関や食事についてはホストであるワシントンセンターが不自由な

い配慮をしてくださった。

- ③ 危機管理関係(渡航先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)
特になし。夜は一人で歩かない、貴重品は常に身につけるなどの基本的な注意でよいと思う。
- ④ 要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)
食費(サラダやスナックなど):1万円 買い物代:2万円
- ⑤ 奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)
なし
- ⑥ 学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)
なし

参加プログラムの環境について

- ① 参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)
アドバイザーが昼もホテルでも常に近くに来てくれたため、常にサポートをされていると感じた。
- ② 設備面の状況(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)
ホテルはジムつきで快適、昼間勉強していたワシントンセンターは wifi もあり、快適

プログラムを振り返って

- ① プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他の所感
アメリカの nonprofit sector の第一線で働いている人の話をきいたことで、nonprofit sector で働くことの魅力を新たに感じた。成長したことは、日米の優秀な学生に囲まれても、引け目を感じることなく、積極的に発言したこと。また、このプログラムで日本人として自分はチームにどう貢献できるのかを考えた。
- ③ 参加後の予定
就職予定。日本の nonprofit sector についてより知識を深めたいし、社会に出て色々な業界の人と知り合いになりたい。
- ④ 今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス
日本人として東北の復興についての自分の考えや熱い思いを持っていることが重要だと思う。また、それがアメリカの学生とプロジェクトをするなかで、自分のアドバンテージとなる要素の一つだと思う。

その他

- ① 準備段階や参加中に役に立ったウェブサイト・出版物
Building the TOMODACHI Generation のホームページ
- ② その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい中の写真があれば添付してください。

